

シリーズ

# 新・農業人

けんちゃんファーム

矢野賢太郎  
さん

行政とJAが連携した  
就農研修制度の一期生  
市田柿の後継者となる

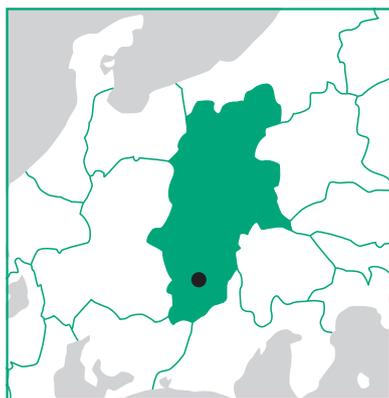
けんちゃんファーム

所在地 ●長野県喬木村

就農年 ●2020年

経営規模 ●夏秋キュウリ10a、市田柿23a

労働力 ●本人、母、パート(繁忙期のみ)



左から母親の瑞枝さん、矢野さん、南信州・担い手就農プロデュースの澤柳さん

## 長野で就農した理由

長野県喬木村<sup>ながまき</sup>の矢野賢太郎さん(23歳)は当地で農業を始めて3年。夏秋キュウリと市田柿<sup>いちだ</sup>を組み合わせた小規模経営ながら、就農初年度に約600万円を売り上げた。軽トラックや柿の加工機の導入など初期費用が負担となったが、中古機の利用など経費節減に努め、250万円近い農業所得を得た。高校進学時から農業を志した情熱とその後の努力のたまものだが、同時に行政とJA組織が一体となった研修・生活両面での支援が実ったものだ。

埼玉県戸田市のサラリーマン家庭に生まれた矢野さんが農業に興味を持ったのは中学2年の時。母方の祖父が新聞を読みながら「これからは農業だぞ」と話したことがきっかけだった。その言葉を受け「農業が勉強できる高校に」と、進学先は二つ違いの兄も通う埼玉県立いずみ高等学校を選んだ。同校は1962年創立の生物・環境系の総合高校。入学1年目は農業と環境を幅広く学び、その後専攻学科を選ぶ。

矢野さんは、そんな同校で学ぶうちに「野菜を育てることや、育て

た野菜を食べる喜びを知り、農業に就きたい」と考えるようになった。ところが2017年、卒業を前に就職先を探すと農業法人などからの求人はずゼロ。

結局、矢野さんはその年の夏、都内で開かれた「新・農業人フェア」を訪れる。矢野さんの父方の祖父は長野県中野市出身で、小さい頃よく遊びに行った記憶がある。自然が多く、立地もとても良い長野で農業ができれば——そんな思いが矢野さんの頭を駆けめぐった。そこで、飯田市と下伊那郡13町村、JAみなみ信州が連携・協働して農業の担い手誘致をめざす「南信州・担い手就農プロデュース」のブースで話を聞くと、かねて作りたいと思っていたイチゴが特産の喬木村を紹介された。矢野さんは「将来はイチゴの観光農園に取り組みたい。喬木村に移住しよう」と決心した。

## 研修制度の一期生に

喬木村は県の南部、伊那谷を南北に流れる天竜川が作った日本最大規模の河岸段丘<sup>かがんだんきゅう</sup>に位置する、人口約6300人の村だ。標高はおよそ400m。典型的な中山間地域だが、冬は比較的温暖で雪は多

くない。古くは水稲と養蚕ようさんで栄えたが、近年は施設栽培が盛んだ。なかでもイチゴが有名で、「たかぎ村いちご狩り」には毎年5万人を越す観光客が訪れる。

新・農業人フェアの後、矢野さんは、飯田市が1998年に開始した事業「ワーキングホリデー飯田」にも参加。ここで果樹農家と寝食を共にし、生活しながら農業を体験できたことも南信州での就農を後押しした。

翌年、矢野さんは南信州ブースで紹介された「南信州担い手就農研修制度」に応募し、同期4人と共に研修第1期生となった。この制度は就農と移住・定住を一体のものとして捉え、官民共同で相談者にワンストップサービスを提供し支援するものだ。

具体的には、研修期間を2年と設定。作目を夏秋キュウリと南信州特産の市田柿などに特化し、JA出資法人の社員にするなどして身分と給与を保証。独立就農に向けて技術を習得すると同時に、就農に必要な農地や住宅、資金の確保を進める仕組みだ。

南信州・担い手就農プロデュースを運営するJAみなみ信州担い手支援室所長の澤柳実也さわらぎみよさん(66

歳)は、同制度の狙いを次のように話す。

「新規就農者の研修では普通、篤農家といわれるような先進農家に研修に入りますが、それでは高度な技の見よう見まねに終わってしまう場合もあります。ですから私たちは、独立後何か問題に突き当たったとき、よりの確に対応できるように、基本技術を徹底して教えています」

また、南信州・担い手プロデュースでは、研修生のために住宅を用意したほか、約3500万円をかけて研修所やハウスを整備。研



取材に訪れたのは、ちょうど柿の収穫時期。農作業が大好きな矢野さんは、いつも楽しそう

修生に安定した給与を支払うため、2年度目からは総務省の「地域おこし協力隊」制度も活用した。

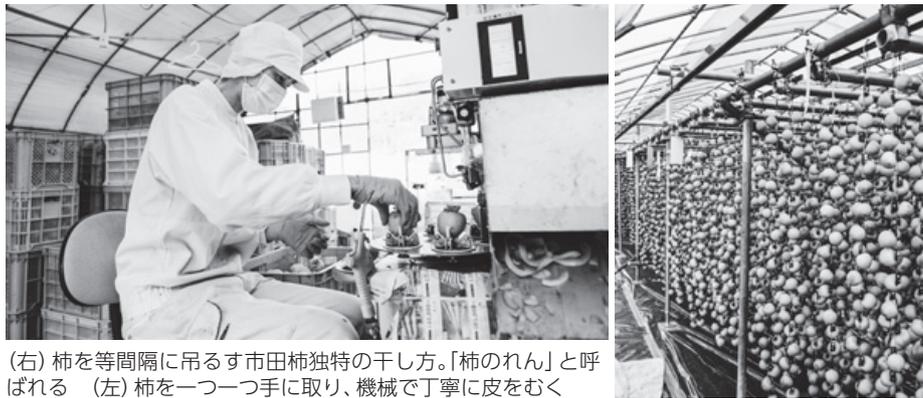
果実主体の複数品目体系、キノコの通年栽培、肉牛飼育専業、半農半Xなど、新規就農者用に用意された7つの経営モデルのうち、矢野さんは「夏秋キュウリ+市田柿(複合タイプ)」を選択した。矢野さんは研修にあてた2年間を次のように振り返る。

「キュウリと市田柿にはそれぞれ専門の指導マネージャーがいて、基礎・基本を徹底して教えます。市田柿には収穫から皮むき、干し

方、燻蒸くんじょう、粉だしこななど、決まった工程があるのですが、一つでも手順が違つと、『そうじゃない』と叱つてもくれました。その厳しさは学校の比ではありませんが、今思えば大変ありがたかった。同期がいたこともプラスでした。研修後はみんなで復習できたし、悩み事も相談できました。新規就農者のためのこうした研修制度が全国にあったらいいと思います」

### 目標は販売額1000万

矢野さんは研修が終わりに近づくと、担い手就農プロデュースの支



(右) 柿を等間隔に吊るす市田柿独特の干し方。「柿のれん」と呼ばれる (左) 柿を一つ一つ手に取り、機械で丁寧に皮をむく

援を受け、喬木村で農業を始めるための準備に入った。研修中に繰り返し言われた「とにかく自分から動かなくてはダメ」との言葉を胸に、各集落のリーダーに片っ端から電話を掛け、あいさつに出向いた。村役場にも頻繁に顔を出して就農場所や就農後に住む家などを探した。

こうした努力が実り、キュウリ栽培用のハウス付きの農地が程なく見つかった。知り合いになった農家から「ここ空いてるよ」と声がかかり、住居も確保できた。市田柿の加工には「柿むき機」や「粉だし器」といった特有の用具が要るが、それらを含め農機はほぼ中古品でそろえられた。また、トラクターなどは近くの農家が貸してくれた。これらはみな初期投資の軽減に結び付いた。

2020年4月、矢野さんは独立就農。露地8<sup>㊦</sup>、ハウス2<sup>㊦</sup>、計10<sup>㊦</sup>のキュウリ栽培だ。夏秋作のキュウリは7〜9月が労働のピークで、この100日間をどう乗り切るかが出来を左右する。労働力は自分と母の瑞枝さん(50歳)、パート雇用1人。この時期、キュウリは旺盛に生長するが、矢野さんにとっては「期待と不安が入り交じる日々」だった。矢野さんは定植を終えると毎日、圃場を見て回った。初出荷は6月中旬。初めての収穫は格別だったが、その後はキュウリが次々と収穫適期となるため、作業が連日深夜にまで及び、「その場で寝てしまったことが何度もありました」と矢野さんは笑う。だが苦労は報われる。最盛期、集荷

場に矢野さんが持ち込む量は1日450<sup>キ</sup>にも達した。「販売代金は毎週金曜に振り込まれます。記帳の度に金額が増えていきました。この時ほど自分が農業で稼いでいることを実感したことはありません」と話す。

同じ年の秋には市田柿を始めた。既に実がなった園15<sup>㊦</sup>を借り、390<sup>キ</sup>を収穫した。12月上旬、待ちに待った「矢野家の市田柿」の初出荷となった。研修中に叱られながら受けた指導を思い出し、衛生管理に神経を使いながら習った通りに加工を進めた。販売収入は56万円だった。

夏秋キュウリの540万円との合計で、初年度の農業収入は約600万円。これに「農業次世代人材投資資金」などが加わり、総収入額は就農1年目としては破格の750万円に達した。農業所得は250万円近くになった。

矢野さんは就農2年を経て反省を口にする。「キュウリはその年の気象条件により、病気の発生や成長がまったく異なります。どんな天候でも対応できるようにしたい。それと、市田柿は加工が大変難しい。まだまだ勉強が必要です」

喬木村に居を移して3年目。「も

っと秀品率を高めた」と、さらなる収入増にも意欲を燃やす。共同作業が日常で、農産物などをやり取りするのが当たり前。近所や仲間との付き合いを大切にすることで暮らしは自分に合っています」と矢野さん。コミュニティの一員として、22年からは飯米用の米(約18<sup>㊦</sup>)も作るようになった。

そんな矢野さんを澤柳さんはこう評する。「常に笑顔でいるのが彼のいいところ。地域の人たちからの信頼も厚い。先輩農業者たちはいろいろなことを言いますが、自分のなかで整理ができていりし、有言実行で成果も出している。将来は間違いなく地域のオピニオンリーダーになるでしょう」

農場には「けんちゃんファーム」と名付けた。目標は「販売額1000万円の早期達成」だ。澤柳さんから「誰かが就農1年目で法人化したらしい」と聞くと、目の色が変わった。近く結婚も視野にある。「農業の楽しさって何?」——そんな問いかけに矢野さんは「作ったものをおいしいと言ってもらえることかな」と笑った。

(全国農業新聞池田辰雄／文 今井卓／撮影)